

1 作物

項 目	作 業 内 容
<p>(1) 麦の播種</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○麦の播種 ○大豆の収穫 <p>11月は麦の播種、大豆の収穫作業の時期である。1か月予報では、気温は平年並～高く、降水量および日照時間は平年並の見込みである(10月20日高松气象台発表)。この時期は天気が周期的に変化しやすいため、ほ場作業は計画的に行う。</p> <p>ア 種子の準備</p> <p>麦は自然交雑が起こりやすく、自家採種を続けると品種特性の劣化、混種や変種が起こるため、2～3年に1回は種子更新する。</p> <p>また、種子伝染性病害(裸黒穂病、斑葉病など)を防除するため、種子消毒を必ず行う。消毒作業については「今月の天候と農作業(10月)」を参照する。</p> <p>イ 土づくり</p> <p>麦の土壌適正pHは6.2～6.9である。土壌pHの低い酸性土壌では生育不良をきたすため、石灰質資材を連年施用する(苦土石灰の場合:150kg/10a程度)。</p> <p>ウ 湿害対策</p> <p>播種期の多雨は湿害を引き起こし、出芽不良や減収を招くため、湿害対策は万全にする。前作が終わったら、額縁明きよを早めに施工し、弾丸暗きよや心土破碎を行い、播種までにはほ場の乾燥に努める(写真1)。</p> <p>土壌が適度に乾燥した状態で耕起を行い、すみやかに播種を済ませる。耕起後に降雨に遭遇すると、播種作業が出来ず作業遅延につながるため、天気予報に注意し効率的な作業計画を立てる。</p> <p>播種後、深さ15cmの排水溝を2～3m間隔で設置し、停滞水が確実にほ場外へ排出されるよう排水溝と導水路を接続しておく(写真2)。</p> <p>溝の深さが15～20cmの畝立て同時播種とすることで、苗立ちが良好となり、播種時の湿害を軽減できる(写真3)。</p>

項 目	作 業 内 容
	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>写真1 額縁明きよの施工</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>写真2 排水溝と導水路の接続</p> </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 20px;"> <div style="text-align: center;">  </div> <div style="text-align: center;">  </div> </div> <p style="text-align: center;">写真3 畝立て同時播種 (左：畝立て板を両側に設置、右：畝立て板を片側に設置)</p> <p>エ 播種適期 ハルヒメボシの播種適期は、11月15～25日で、11月上旬以前の極端な早播きは、過繁茂等による黄枯れが発生しやすいため避ける。</p> <p>オ 播種量 ㎡あたりの出芽数の目安は、ドリル播栽培では150本、全面全層播栽培では200本程度である。10aあたりの播種量目安は、ドリル播栽培（条間20cm）で8kg、全面全層播栽培で15kg程度である。ただし、ドリル播栽培で播種期が早ければ反当6kgである。また、播種期が遅いほど出芽率が低下するため、11月25日以降の晩播きの場合は、5日遅れるごとに播種量を1割増量する。</p> <p>カ 播種深度 播種深度が深いと出芽率が低下し、その後の生育が極端に悪くなる。また土壌が過湿の状態では播種すると機械が沈み込み、播種深度が深くなりやすいので、事前にはほ場の乾燥に努めるとともに播種前には入念に機械の深度調整を行う。</p> <p>ドリル播栽培では耕起深5～10cm、播種深1～2cm程度を</p>

項 目	作 業 内 容																					
<p>(2) 大豆の収穫</p>	<p>目安とする。また、全面全層播栽培では、1回耕の場合は耕起深を8～10 cm、2回耕の場合は播種前の耕起深を10 cm、播種時の耕起深を5 cm程度とする。</p> <p>キ 施肥量</p> <p>基肥は、ドリル播栽培では10 aあたりチッ素・リン酸・カリを5～7 kg・6～8 kg・8～10 kg、全面全層播栽培ではチッ素を8～10 kgとする。過剰な施肥は過繁茂を助長し、倒伏や品質低下の要因となるので避ける。また、肥効調節型肥料を用いた全量基肥施肥は晩播きでは避ける。</p> <p>なお、黄枯れや枯熟れが発生しやすいほ場では、追肥重点型施肥にすると減収を回避できることがある（追肥重点型施肥：基肥量を減らして過繁茂を抑制し、葉色に応じて中間追肥を分施する施肥方法（下表を参照））。</p> <p>表 追肥重点型施肥の施肥体系（チッソ成分kg/10 a）</p> <table border="1" data-bbox="550 996 1295 1198"> <thead> <tr> <th rowspan="2">施肥法</th> <th rowspan="2">基肥</th> <th colspan="2">中間追肥</th> <th>穂肥</th> <th rowspan="2">計</th> </tr> <tr> <th>12月下</th> <th>1月下</th> <th>2月下</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>慣行</td> <td>7</td> <td>0</td> <td>2</td> <td>3</td> <td>12</td> </tr> <tr> <td>追肥重点</td> <td>4</td> <td>3</td> <td>3</td> <td>3</td> <td>13</td> </tr> </tbody> </table>	施肥法	基肥	中間追肥		穂肥	計	12月下	1月下	2月下	慣行	7	0	2	3	12	追肥重点	4	3	3	3	13
	施肥法			基肥	中間追肥			穂肥	計													
12月下		1月下	2月下																			
慣行	7	0	2	3	12																	
追肥重点	4	3	3	3	13																	
<p>ほ場内の雑草や青立ち株は、汚粒の発生原因となるので収穫前に除去しておく。</p> <p>大豆の茎水分が高いと汚粒の発生が増えるため、茎水分が50%以下になってから収穫を始める。目安は、茎が黒ずみ、手で容易に折れる状態であり（写真4）、収穫適期の子実水分は18%程度である。子実水分が18%よりも高いと潰れ粒、低いと裂傷や割れ豆などの損傷粒が生じやすくなる。</p> <p>収穫時刻は、汚粒の発生を少なくするため、茎や莢が乾燥する午前10時以降を目安とする。収穫後は、子実水分15%に仕上げ乾燥し、選粒機を用いて莢雑物や被害粒を取り除く。</p>																						



写真4 大豆の収穫期

(作成 農林水産研究所)